

國語
4L
95
4

明烏四編序

柯を伐て行ん

餅屋乃世の徒

楚満人ら甘酒銭の栖

小ろもそやのそら

ゑ尺ども同ど流ん

と豚迄ま石中

と彰し山と山

ゑ作者の歳ち

の雛鳥

L 112805

えぇ何ぞかうくつろぎ
さま
事ひ種
ぢ
鵜を抱し
ぶ
序文
しまうまでもこれよりこと
ぎ
ま
ぬ
端書
ぬ
此明
ぬ
鳥の
ぬ
偏
ぬ
ぬ
ぬ

寝言(ねごと)
首尾(しゅび)やうかゝる浪話をまぐそ
文政七年
柙濫(おりのみだり)庵のあるじ
驛亭駒人識
巻

東京山翁著

歌川豊國揷畫

女房かゞみ

全部二十五編揃の内を區別して讀切目錄左の如し

但し壹編中本二冊入

○貞操於律の美譚　けだし初輯の讀切より

○姫上手於兼の傳　けだし二輯の讀切を

○善惡孝心の權妻　けだし三輯の讀切を

○表裏嫉姤の本妻　けだし四輯の讀切を

○嫁いびりの惡姑　けだし五輯の讀切を

○孝女於花の仇討　二十一編ホはじまり廿五編に終る

○毒婦おてふの談　尤も渉猟へ向き合本并び貸本用綴分け上仕立ゐ事

猶入よみ年　慶兒の告像

東生時次郎 明後正夢巻之十

第十七回

江戸

南仙笑楚満人

巍亭鯉丈 合作

説経節

中の巻にまろ一ふしの
甘きをうるごと
浦里が
義理を
子の
ため
目あの
身を
のぶよもと紅」草
訛や唱哥も
あり
恵宇屋
あぶら

にまろ一ふしの苦界
のところそのおりの俤
を身にそへ昔
物語
ちぎり
かたく
ながく
末
かわ
ら
同じ
屋敷
住
余所
我

もうそうの妹と夫ともどもに
どうぞ御慈悲に御助け下さるやうにと
願ひ入ります。
其の大切の
ものを。
とうとう
盗まれまして
誠に
申訳が
ありません
と
平あやまりに
あやまりました
まことに
済まない
事ですが
其の
品は
まだ
出ません
荒川一下
聞に入
渕右
手
ありの女郎うの目にめもくれず
おまんと夫婦に
なりました
詫
言
ござる
十左ど
の

とく年そこもうねこる小めり
ぞんぞ存もよろめく横着ものの
ごうりん拷問いまもなほ耳イ詞に白状ぞ
つもと。お松があとを髪引き
あまお物見下に女のうめき
えでのまぶ丹後國強欲非道の山椒太夫あさうまる
男の三郎せんと立うる安寿の姫ハ
まろう松 渕岩

のそもそも三男
早乙女家の三郎柚者
おぼろイヤサむごの手料
とおり見立の通り
大切の家の宝紛失
詮議
時次郎役目でござる
ござるて勝手
柚者も役目
柚者
怪我あまた
十五
イヤお役目
夜より預る

（仁田山）
イヤ
打ちそくびれ
（次右）
ハテ
かうぬせ
（仁田山）
イヤ
待ま
（次右）
ハテ
逢あ
（仁田山）
アイ
（お松）
アイ
（仁田山）
イヤ

その拙者こりゃ。
こりゃあまりそもそも
異見めん。よ。
身と大切に毋
只。呼ぶぞ
ぶぞ。
支ゑもうめそ
もちくの妻見
君へ。巡
りあうん
手と来れて
只今の
安寿の姫
乙女
仁田山
の
荒川氏

理のそふ非ぬ後日のお咎めを
懲しめ猶豫ならく
のこと○ども妨げとあるを
れ顔あふ合せて荒川へ。思ふ物ぞ
もうく色も
そおぼえず扇のそ拍子打
早あけろえと
れ枕をもろに

おとこ
男のいまだ元服もせぬ
わざ
業にへ額ひのあ
ひと
人へなのりよ
ものぐ
ものぐさの
おも
思ふ
ひと
人の
ひと
人
ひと
人
ひと
人
ぶつ
仏
ぶつ
仏
ぶつ
仏

ゆふひ流そ一トし月に内外もと
ともやまと知らぬに
えぞうそやまの朝の和と思ふ
うらうと。
ごぜん前へ後ろもまそこの曲でへ
の浜さその海よ。
打みろくやと狭成お角力
よそ浜よりへのとぐ不便と奥方も人目紛らも
イヤのよ昔のものぐさりあるとも
ひとぐら五十四郷名も

高き城の判官の某と
敵八何のともも知らぬそも
知らぬ国に殊よ無益の
おうちやと。安寿の姫と
三郎とや猛く落ぶ
長柄
まてこにくてふぢや舟虫ぶの
生うんしと
似ともく
猛
三人
コリヤあふ舟虫ぶの
そのまく

かくまもるうちに。隣へ筒ぬけ
女中とちらり。あるを。當ヲ眼のまと
縁あり廻し。手ぬくもそこそこ。
合ゐ悪。ろくえんぢやう。の根性。泣てあどせべおてまえんだ。
どのも涙。ざ。
てもめうのそこそこ。附ふ。
あろうがよ。彼三男の三郎よ。匂ゑ
もらはれ。ぶらぶら。しやばへ出ても。
逢てくれ。ぬ。
十左エ門どの見さうもなく。
淵右
十左エ門。ゆゑん。無念
淵右エ門。ちもり。
手ぬくもそこそこ。
そこそこ。
手に取るやうに。
仁田山。にきまつ。
ぬ。
ぬ。
ぬ

敵(てき)に当(あた)まぢの取(とり)もちまあよくも
もいろうさえもん
土平(どへい)
あつまるあうた
兄(あに)のあぢ
両人(りやうにん)
そこやとをかぢ
きくえもんなに胸(むね)
覚(おぼ)えよそうかまもちがき
右エ門(うえもん)初(はじめ)
思(おも)ふまゝ測(はか)
幸崎(さいさき)甚三郎妹(じんざぶろういもと)
コリやく
お松(まつ)
萬(よろづ)吉(きち)
大吉(だいきち)

安堵せよ
兵三郎がかりの年とらず
判官あらく
切腹のおそろしき
あるの今
さて首
ものまた





さそ憎う
ず大不得手
ひとのみひ
額へ膏薬
「ワアワ
とあ松
く猶も奥方の
浦右門
火箸へ山
そそあと

ぞ泪がきらひ
え
ろ
ぐ
ぢ
ぢ
ぢ

知らぬと
よそ
篠の伏の鉄
そろ
ぬくもりや
あの兄そろ我慢のふる
左エ門 浦里 お弓 十次郎 一ト間に
甘ぎ
おかる
ぞ
知て兄の着
そろ
の衣とうみ
ら
持ふ
のとそ
勝
にきろ
私
今の通
こまき
の扇の骨
かけひ
火鉢に打
うち
契くも
ふたり
ひ
ひや
ひ
ぐそ
ふたり
ふたり
ふたり

みよ身邊の物を「語りてそ
差圖にて下部の土平狹箱より札
取出すを、物見のまゝ
次ぐ〳〵と上ぐる。奥方へ捧
げ「そもふと。お局の取
上ぐるを直よ
押ゆるまゝ身を
立て去んとす。
「こゝを見
よ。仮名書の女筆にあ
らず。敵が詐りたる狂言
也。三郎が妹にてこの錦倉にへ甚
```
```

こと也。筆の運浪くの如く、細くの筆の運へ、願ひありと勤まつて、千葉家へ古主の奥方を深く感じ、扨も〳〵奇特成る女中哉と、感じ入て居る。今の願ひ書、何卒〳〵と頼む。長雄と支あつて。今の願ひ書、何卒〳〵と頼む。長雄と支あつて。今の願ひ書、何卒〳〵と頼む。長雄と支あつて

その文の
願ひのごとく。
来るべきを
涙ながらに
へまゐらせ
測右エ門
新吾十左
箸にて

お露も疑目鉄
明日庄次汰あ
二見十左衛宅へ
お眼のうちも
。明日と約し
旅宿へ
奥方の
御介抱
お松と引
居てその文を
燃えるとこ

奥方のお意もあやまりて
立つと告ぐる渕右エ門驚きうろたえて焼火箸と
袴の裾にまとわる氣色風情。何
ぞ押込く。
ぞ押込く。
それと一抽詮
なきまでに。笑ひ手筈。
あれど。時次郎がもくろみ及ばず松の色
次郎が間十左の勝手に取入とのこの意
昨日より二見氏の脊折拙者迎ひ
と差出ら煙立

仁堪へ人ら。絲。拂ひ除のけ
仁田山が。膝へ飛ち散ら
の水と二人が。打ちのめ
度物。狼狽週章て
田山荒川刀。提げ
と目礼し
雨に。あめ
虻の如く正中へ雷一

（一）かく奥方の仁心もて現ぞくの大膳の悪立みの内く国家のうごくをあらく荒川渕左エ門に召捕めと厳るるをもとぐるく折とまた名谷何とまなく日数と重ねるあとにて

軒端くの行燈に家名の女文字あんどうまるなもよろ

客人の仰と三
輪の杉ぢゞ客待顔に
蜘蛛の糸女房が舟招
あそこ呼上ると全六が。
まづお先へと全六が小男
客歳のころべらし
女房のお見限り
「ヲヤだまだぶとい
あの女房方」
全六さんお茶と且那
今日ハ暑うござ
全六さんあなたも度〻

あやまりそうそう波吉さんのおうち
別れまして
ひろう廣沢の茶屋
より茶を汲でもや
お家さん何
且那と連て涼みがてら的めがあへまあ
あうそやとぬかして
店もあげて
金六
ア

今日の暑
色男へうつるさの
火鉢に
ヤ

イヤモ誰有ふ春日屋の
頭藏
勤るこの全六種々の

偽をいふて来るとのみ。アノ女子が艶しく
底とのく又藝子の浪吉を
目附きそろ〳〵老実るを
そもゝ是こゝ
と思べ昔の人のいへる
山にへ孔子も倒るゝと
ゃ〳〵く全六ヶ
何とのろけおるゝ。
晴未だ内
拙者今日八

渕右

又節くれあり。合鎌り。
うつくしき美しの。
ぞうもつ
且那何物ぞ。
さうらふ
さうらふ。
女子姑め彼吉めも。
こなたこなた
こなたこなた。
捕て愚痴の。
ぐち
胸がどきどきそあるうち。
むね
來急がでござりまする。
そよい
今宵合申ませう。
ぶつ
全ヤi
女房ヲ本ニ
全六への付

まま寐の
いくらあやつ
あうのこそ
あまびの涼
ぶらぶらで
あるあでへ
あらお家
夷奴へ
呑るあとの
駄ど
又
文房
又悪口ぞ

物と上まうこと。そんな物へ
二階の方へ向ひ
ト
大きな声にて
呼びく二のそ
ト
アイおのくうぐ
ぞ
まうこと。ハイあるそ
あとそ
モシ
めうわうお暑うござ
ますそ今夷菴うら
そうれ
文房
うそうそ河岸へ行て舟と
纏そうぢ犬縄
ひきづ
ろ
ひろ
ろ
ろ

よく。明朝(あさ)は
まゐり。市(いち)ぢゆうにあつまりて。一盃(いつぱい)あしなどのみて来(き)
うらぐら白壁(しらかべ)の時(とき)ありて。富士(ふじ)が根(ね)と
きんじやう金城(きんじやう)の落日(らくじつ)に映(うつ)る景(けい)。佛(ふつ)の国(くに)に有(ある)ごとのやまこれ
乾闥婆城(けんだつばじやう)に彷彿(ほうふつ)たり。行(ゆく)と送(おく)と歸(かへ)る
のうふねこぐ入船(いりふね)交(まじ)る。こゝの夕風(ゆふかぜ)
ふぐる。

黄(き)こゝもそも舟(ふね)頭(あたま)ら浴衣(ゆかた)
のすゞみとめのぞ掉(さを)とゞめて直(ただ)ちに
出(いで)ぬる川(かは)の面(おも)向(むか)ふに市(いち)へ
やアイ(いら)次郎(じろう)へ

先ヘ昨夜ハ
ヲヲ女ガ
ヤヤヤ
ナ
ガラ。
此程
アル
赤イナ。
市ニ馬ヲ
ヨウ
庵アルヤウ
息
疱瘡ヂヤ
ヨウ
ヤイ〳〵
ヲヲ
當ヘ
ヤイ〳〵
一本
ヲヲ
ヤヤ
ヲヲ
ヤヤ
ヲヲ
ヤヤ

渕へ　時ゝ金六ゝ見ゆると無理にもあて連てゆくぞ。
見ゆるとも度ゝ同役ぞ共ゝも同行でもあるまいぞ。
もつてのほかの婦妻川と申地とやらん。
あやぐどもの風俗の呼びや　全へ　ちやんでもあるまいぞ。
まゝ。イヤ又ちがつた芦原へとちぐるで暑い時ぶんや
なぐへ水辺やさぐるそ一向名のぶえ。
もナ見通しとのてナ。廣ゝ座敷のナ障子もあるまいぞ。
遥ゝ向ふの品川沖へ本牧の

端(はし)より上(あが)總(さ)房州(ぼうしう)四国(しこく)西国(さいこく)阿蘭陀(おらんだ)
ぞ。(そこ)夷(えびす)。皆立(みなたち)朝鮮(てうせん)の釜山海(ふさんかい)
だうりまやの女(をんな)の風俗(ふうぞく)
の結(むすび)よう衣裳(いしやう)迄(まで)
ろ〳〵意気(いき)乳(ち)
女子(をなご)。皆(みな)
あげづくし
鯉迄(こひまで)。名(な)
化(ばけ)あぶやぶ。ハ

旧悪自ら
脱れんと責て
全く鬼怪
と為る



芋幸に　静雀震
ものに　舎よ梅雑と
波吉と　上代物そとの
子が内方のお照さえよ。　美しの藝子がある。
よふる奴うナの　コレぐ　初度毎に何ぞ
そぶまこらも未　ぐへ通さ
美味いめく喰飽こそぶれん
と母そうでけうると　酒ヤ大

全六そのくらゐあつよ夢中よ
シテ其方へそこへくく
そのよふよくと二ちやでもごぢやまのろ
から四五ど度毎にまんのうさせ。
にくと客も落遇よて。
まあ度ごろくく噺さへ
のうそまあれ寝ころもとそ
日のんべうこそ店で帳合あ
そこそこそこそこそこそこそこ思ひ

帳合（あひ）（ちやう）（あ）（あ）

（測）

（イヤ）（そ）（ま）（ま）（ま）（ま）

（全）

（何）（も）（変）（う）（て）

（ま）（ま）（ま）（ま）

呑(のん)で氣(き)分(ぶん)晴(はれ)らそと東(あづま)庵(あん)へっろそろりの
呑(のん)ぶ緣(えん)の合浦(がうら)樓(ろう)。船(ふなばし)橋(へさき)
のんぢこも地(ぢ)玉(だま)とのふ女子(をなご)よえで見(み)そこ
ぶ。(まこと)誠(まこと)に玉(たま)のよふなる姿(すがた)もうらくしの
無(な)くて藝子(げいこ)が淋(さみ)しの。(のるこそ)浪吉(なみきち)とのふすがこ
のふろろ浪吉(なみきち)とのふすがこがきてぢやがいん
まもの。(のるこそ)ふりお隱(かく)さまにいきうとおもひ
ぶよそ

たくらみ淵（ふち）の此（この）男（おとこ）へ又（また）しても
きます。いふ如何（どう）のこゝろあつてぐ。
この間（あいだ）も折角（せっかく）お松（まつ）とゝもに
そゝのかし説落（ときおと）したと思（おも）ひのほか。奥（おく）
の口（くち）より音（おと）きえて又（また）偽（いつわ）りごとぞ。イヤ
もう〳〵あてにならぬ女（おんな）どもハ鬼角（ともかく）
彼梅（あのうめ）ヶ谷（がや）
梅（うめ）ヶ谷（がや）と
あくまでとゝろ
まで
奥（おく）
の口（くち）音（おと）
聞（きこ）え
ず。註（せん）
索（さく）
遊里（ゆうり）
の
女（おんな）
郎（ろう）
衆（しゅ）
達（たち）
の
詞（ことば）
ぞ
ゑ
ん
ろ
う
で
私（わたし）
が
別（べつ）
染（そめ）
で
ある。

お玉なども信実とやらの妾になって
まうまいと全六さんだ。初夜をも
焼いてくれ早く家へ来ておくれ
もうううの客人が来てゐやうもの
猫を寝かして下さんせいそ
おろそいんぢ待ど暮せど来ぬまぢ
見えもあめまぢ。次第に夜も更ち腹へ

行ふ相撲へ
ずに私がづく
めづくうろ
とぶとまり
かるうろ。
「三人ハ
又めんよ。
敷の傍
客が
色男で其
たとやぶ
あの若イ

彼里でへ兎角野暮と
斗せ。可愛私とのふあまさせん
のや否ゐ男のみと傍へ行でのらおまめぶ
で晩らに覗しらまるせ。こゑぶおい前きまう
のふしまるホヲイくく渕イヤ其方へ泣上戸ゑる。
くくそゑへそあとゝ嘲きなまる訳とうの
達てぶの彼ひとの全品「えりやアノ
渕「ヲレトあくりと見まるまを折うう隣のとゝりの船ゐ
弾出ス

誰手づきそろ三味線のの。
時にろそろの鳴物と二人ふりの。
ろろ後の方。がうりと明て
おろくろ蜜よ耳の口私
市「モシ船頭ぶ
全「サア付ろ
市「ハイ有難ぶ
ろろ盃がねぶろ
ろろ「すまぬぞと
ろも「雲間の月も
ろも「勝臓と
ろも「波の音。

夜もすがら折ふしもあれとうち姿
きのふの項ころ。儀七が面影
に思ひおこせワット落る我手に持つ盃
を音もなくへ向ひの船の青簾
トのふ声唄ふ霞む佃節 全
あぢな船ね松右衛門と左へ漕
浦里 あぢな ものの まねの
時次郎 明石馬 後正夢 巻之十 終

